



「自分が小学生の頃から聞いていた人たちが、これからもしゃべろうとし続けている」

SPECIAL INTERVIEW 武田砂鉄

東京で初めての民間放送局として開局し、70周年を迎えたラジオ局「TBSラジオ」。書籍『開局 70周年記念 TBSラジオ公式読本』（リトルモア）では、同局にゆかりのある31人が思いを語る。自身もTBSラジオのパーソナリティーで、責任編集を務めたライターの武田砂鉄に聞いた。（撮影：蔦野裕、撮影協力：新宿「どん底」）



「皆さんに共通するのは、10年やっている人でも30年やっている人でも、毎回毎回“これで良かったのかな”もっと面白くできないかな”と繰り返し考えているところ。それがリスナーとして聞いている限りは分からないというのは、卓越した技やいろんな鍛錬があるということ。本を読んでいたければよく分かってもらえると思います。僕らが聞いている“いつもの感じ”を作るために、何を乱しちゃいけないかとかどういふところを強化しなくちゃいけないか”というのを、考え続けているんだと思います。“隠れて努力しています”ということではなく、考えに考えて現在があるという事実を知りました。

ラジオパーソナリティーってこれだけ毎日しゃべっているのに、自分のことはあまりじっくりしゃべらなかつたりもする。今回の本を多くの読者が手に取ってくれている理由のひとつに“この人はこんなことを考えているんだ”と知る機会が意外となかったというのはあると思いますね。これだけの内容を、わずか半年間ほどで制作したことに驚く。「冷静になってみると何で終わったのかな」と思いますけど、でも、やれば終わるんです（笑）。僕が以前働いていた出版社に「文藝別冊」という人物特集シリーズがあって、基本的に編集者が1人で1冊担当するんです。これが若手の課題で、たく

さんの人に原稿を頼んでインタビューを取って昔の原稿を引っ張り出して、短い期間で一冊にまとめる。大変だけどすごく楽しかったんですよ。その感覚がかりうじて体に残っていたので今回の本ができたのかもしれない。そういう経験がなければ、たぶんパニックになっていたはず。出版元の編集者も同じやり方で本を作ったことのある人だったので、お互いに“無理に頑張れば終わりますよね”というところで合致していたと思います」

自身も多くのラジオ番組に出演してきた武田。「2014年秋に赤江珠緒さんの『たまむすび』のゲストで出たんですけど、2015年に本を出してからプロモーションでさまざまな番組にゲスト出演したり、荻上チキさんの『Session-22』の代打をやらせてもらったり。僕自身ラジオが好きだったので、AMFM問わずラジオのオファーであれば何でも出ています。

ゲストで出た時は、自分がしゃべることでも何か楽しんでもらったり興味を持ってもらうという着眼で臨みますけど、現在パーソナリティーとして出演している「アシタノカレッジ」では、2時間全体をどういう温度感でやったらいいのかとか、全体を見ながら“あれで良かったのか”“これで良かったのか”と毎回考えています。あまり自分の話をし過ぎてはいけない、かといって相手の話を聞いているだけじゃいけない、そのバランスがどこにあればいいのかというのはいまだに手探りの状態ですな」

僕自身は便利になることにそんなに興味がない

森本毅郎さんの新聞記事を読む技術や、ニュースデスクの近藤美矩（よしのり）さんなど、普段私たちが目にしない「伝える技術」も登場する。「森本さんと近藤さんは、頭の中に“今、あのニュースがどうなるか、どう動いているか”ということがインプットされては、だから目の前に新聞があるだけで情報が補完できるわけですね。技術というよりは日頃の繰り返し、反復によって補える状況にしているということなのだと思えます。森本さんの場合は常に“新しいニュースはどこにあるんだろう”とか、“夜から朝にかけて何か補足するところはなんだろうか”と、ずっと考え続けていると思うんですよ。だからこそ、新聞を見るだけでそこからニュース原稿を別紙にまとめ勝手に作るということができないんじゃないかと思えます」

自身の番組で準備はどの程度行うのか。「僕の番組はゲストコーナーが30分くらいあるんですけど、なるべくインタビューする時に“これまでにしゃべってないことを引き出せばいいな”というのは頭のどこかにあります。ゲストと一対一で話をするので、それなりに“ああいうことを聞こうかな”“こういうことを聞こうかな”と準備して行って、ただ、それを頭から順序立てて聞いてもしょうがないので、その場で発生したものをすくい上げていく。準備して壊していくという感覚があります。

日頃、ラジオ番組を聞きながら、どうしても“決まりきった形のインタビューって面白くないな”と思うことが多いので、自分がそうはならないようにしたいなという



武田の（放送のおとも）を聞くと……。 「これが……面白くないことに何もありません（笑）。イヤホンも普通だし、ペンも普通だし、特に何も無い。始める前にトイレに行くくらいですかね。あとは入り時間をあまり変えないというか、いつも同じ電車で行くという変な神経質さがありますけど、皆さんそれぞれの守りごとや決まりごとがあるんじゃないかと思えます」

のはいつも考えています」

爆笑問題のインタビューの中で武田は「コスバ」って言葉をよく使う人がどうも苦手なんですけど、あえて使うとすると、ラジオって、コスバ悪いじゃないですか。話すほうは儲かるわけではない、聴くほうは時間がかかる。でも、だから、好きなんです」と語っている。

「コンテンツ」という言い方も好きじゃないんですけど、今、いろんなコンテンツが“こういう本を読んだらこういう気持ちになれる”“こういう映像を見たらこういう気持ちになれる”という目的がはっきりしているものばかりですよ。ラジオって2時間間しゃべったとして、そのどこにどう反応するか分からないし、しゃべっている人自身もしゃべりながら考えが変わってきたり、しゃべるほうも聞くほうも蛇行運転している。その蛇行運転がどこで交わるか分からない感じが面白いと思うんです。誰かがポロッと言ったことがものすごく心に刺さったり、何が起るかわからない余白が残されているし、聞く側を信頼しているからこそ成り立つメディアがラジオで、そこは今の目的化されたコンテンツにはないところだと思います。

よく大沢悠里さんが言うことなんですけど、基本的にはどこか遠くでちょっと流れていて、自分が気になった情報があったらそれに耳を傾ける。日常の中に溶け込んでくるのがラジオだと。この感覚を代替するものはあまりないような気がするんです。

たとえばラジオで“猿が逃げています”というニュースを食器洗いしながら聞いていたら、猿が逃げる光景を頭の中で勝手



にふくらませて補完するわけじゃないですか。どういう猿がどこで逃げているのか、商店街なのか、もしかしたら学校の校庭なのか。そのほうが僕は面白いと思うんですよ。

今回の本は、それぞれよく聞いているパーソナリティーのページから読むと思うんですけど、自分の頭の中にある声で読んでいて、彼らの今まで全然知らない側面が出てきたりするとすごく面白いと思うはず。初めて知る話なのに、その話は、いつもの声で聞こえてくるはず。

僕もインタビューした人たちのラジオを聞いてきたので、インタビューをまとめる時に自ずとラジオの声を意識してまとめることになりました。どんな人でも取材を受けている時の声やテンションって、放送で話している時とは少しは異なるものですが、生島ヒロシさんの原稿は生島さんの声で再生されるから、生島さんはどういふ感じでしゃべるかななどと、インタビューした人を意識しながらまとめました。僕もいろんなインタビューやまとめをやってきましたが、ちょっと独特の体験だったかもしれません」

紙媒体の「TOKYO HEADLINE」は今号で季刊発行となる。武田自身はメディアの楽しみ方の変化をどうとらえているの

か。「これは本当に賛同されない意見なんですけど、僕自身は便利になることにそんなに興味がない。音楽を聞くにしても本を読むにしても自分に負荷をかけるというか、わざわざ面倒な形にしておきたいという考えがあるんですよ。自分が学生の頃に、CD1枚買うのにすごく吟味して、そんなに良くないアルバムを3000円で買ってしまったとしても、何度も聞いて“この曲のここはいいな”と無理やり思う、みたいな経験を割と大事にしているところがあります。自分を納得させるために頭を働かせて“6曲目の後半だけがいい”と思えるのって大事だなと思うんですよ。今、座っていれば何でもかんでも目の前に情報がやってくるから、受け取る側がちょっと偉そうになっているところがあって、提供する側も当然“あなたに心地いいのがこれですよ”と操縦しようとする。そういうものをどんどん外していきたく思っているんで、本もCDも“物”で買うというのは心がけています。

もちろんラジオもradikoのタイムフリーで聞くのが便利なのは確かなんですけど、ただ提供されるのを待つだけじゃなくて、どこかに負荷をかける意識を残しておきたいんです」（本紙・後藤花絵）